

# 第13回 沖縄県医師会ドクターズフォーラム

## 「私の働き方～医師の働き方を考える～」



理事 玉城研太郎



第13回 沖縄県医師会ドクターズフォーラム  
 テーマ：私の働き方～医師の働き方を考える～

日時：令和元年9月19日（木）19：00～  
 場所：沖縄県医師会館3階ホール

### 会次第

司会 新垣 紀子（沖縄県医師会女性医師部会）

1. 開 会
2. 挨拶 依光たみ枝（沖縄県医師会女性医師部会）
3. 講 演
  - 進行 宮里 恵子（沖縄県医師会女性医師部会）
  - (1) 「私の子育て」  
 中頭病院 麻酔科 高橋 和成先生
  - (2) 「育児と仕事：worklife balance」  
 国立病院機構沖縄病院 脳神経内科 城戸美和子先生
  - (3) 「女性医師の働き方の1例」  
 豊見城中央病院 呼吸器内科 佐藤 陽子先生
  - (4) 「介護：両親の看取り」  
 浦添総合病院 外科 古波倉史子先生

4. 意見交換  
 進行 知花なおみ（沖縄県医師会女性医師部会 副部長）  
 宮里 恵子（沖縄県医師会女性医師部会）
5. 総 括 玉城研太郎（沖縄県医師会 理事）
6. 閉 会

去る9月19日（木）本会館においてドクターズフォーラムを開催した。今回フォーラムでは、「私の働き方～医師の働き方を考える～」をテーマに、育児や介護を通じて様々な働き方を実践してこられた先生方より講演いただき、全体で意見交換を行ったので、以下に会の模様を報告する。

### 挨拶

依光たみ枝 沖縄県医師会女性医師部会部会長（代読：知花なおみ副部長）より、次のとおり挨拶があった。

2007年8月女性医師部会が誕生し、今年で満12歳になり干支が一巡した。本部会はこの12年で大きく成長した。年間の二大イベントとして、「病院長等との懇談会」、「女性医師フォーラム」がある。今年度の「病院長等との懇談会」では、今まで聞き役だった管理者、院長にシンポジストとして発表いただいた。

また今回「女性医師フォーラム」がドクターズフォーラムへ改名した。当初女性医師支援をメインテーマに開催されたフォーラムであったが、会を重ねるうちに女性医師のみならず、男性医師も含めた支援の輪が広がった。女性医師が働きやすい職場は、すべての医師が働きやすい環境だとの認識も生まれ、今回の改名につながった次第である。

二大イベント以外の活動として、MLの立ち上げで現在300名を超える登録がある。また沖縄県医師会ホームページに、育児・家事・再就業支援として女性医師バンクを設立、その後男性医師の利用も考慮したドクターバンク（職業紹介）への改名、研修先施設へ出向いてのプチフォーラム、琉大医学生への「キャリアパス講座」、その他女性の立場から意見を要望される委員会への要請等、当初は思いもつかなかったネットワークが広がりつつある。

医師の働き方改革が国レベルで検討され、法制化された。いろいろな課題がまだ解決されていない現状であるが、大きな一歩になると期待している。

今回のフォーラムは「私の働き方」をテーマに、様々な立場からの発表である。金子みすゞの「みんな違って みんないい」で多様性の働き方を皆が自然に受け入れられる医療現場になることを切望して、活発な会になることを期待している。

## 講演

講演では「私の働き方」に焦点をあて、育児や介護を通じて様々な働き方を実践してこられた4名の先生方より発表があった。

### (1) 「私の子育て」

高橋和成 中頭病院 麻酔科医師は、医師で妻の一言をきっかけに、これまで意識してこなかった育児や家事にどう向き合ったかを紹介した。

- 「食器洗うの手伝うよ。」と言った、その日から私の人生は変わった。
- キーワードは「主体性」。結婚したら、医師である妻を助けるぞ！家事も育児も手伝うぞ！妻が「やる」前提であったことに気付かされた。
- 妻の激怒を機に、二人で暮らす家の事、二人で育てる子どもの事は、手伝うのではなく、自分の事として捉えなければならないと、思うところからスタートした。
- 実践して思ったことは、家事ができ、育児ができると、家庭は回る。子育ては本当に大変である。育児までに家事をマスターすることがポイントである。
- 危険な主従関係、「主」となり、家庭全体をマネジメントすることが必要である。「従」のままでは、気づきは生まれない。
- 家事も育児もキーワードは、やはり「主体性」である。

### (2) 「育児と仕事：Work life balance」

城戸美和子 国立病院機構沖縄病院 脳神経内科医師は、7年間のブランクを経て復帰出来た要因や復職後6年間就業継続出来ている要因、職場復帰・仕事継続に必要な条件を次のように纏めた。

- 復職出来た要因は、臨床に戻りたい、自分がしたい仕事のイメージが明確にあり、チャンスを狙っていた。また実母の全面協力が得られ、夫も基本的には復職に反対しなかった。さらに、子育て女性医師支援を掲げる沖縄病院で、時短勤務の希望が通るなど、復職を相談し易い職場を見つけた。
- 復職後6年間就業継続出来ている要因は、実母の全面協力と夫のサポート（現在実質5：5）がある。また院内不在時に脳神経内

科スタッフの協力と理解がある。さらに病棟看護師が私の勤務時間内に連絡する等の配慮があり、夜間・休日の電話呼び出しは年に数回程度である。その他、希望通り外来と病棟が担当出来るため、仕事が楽しく、働きやすい。

- 職場復帰・仕事の継続に必要な条件は、①復職への熱意（どんな風に働きたいのか、明確なイメージ）は大事。②サポーターの確保（親・夫・保育園・幼稚園・公的育児サポート等）は必須。③自分の采配で仕事量が決められる。④職場スタッフの協力・理解は必須。⑤不定期でも休みが取りやすい職場環境・職場の雰囲気。⑥希望者には日当直やルーチンワークの免除がありがたい。
- 自分に心地よい、バランスの良い仕事量・熱量は一人ひとり異なる。復職に際してサポーターは必須である。自分一人では必ず無理をしてしまう。言いたいことが直ぐに言える職場づくりが重要である。

### (3) 「女性医師の働き方の1例」

佐藤陽子 豊見城中央病院 呼吸器内科医師は、何かを変えたいと思った時、身近にいる先輩への相談、自身のキャリアアップに繋げた一例を紹介した。

- 琉球大学病院でキャリアを開始し、現在の施設で24年目を迎える。3名の子育てをしながら、フレキシブルに勤務を継続中。
- 急性期病院で外来のみを預かることにストレスを感じていた。ここでしか診れない症例がある。しかし入院患者が発生すると、お願いしなければならないことに疎外感的なものも感じた。
- その頃から環境を変えたいと思い始め、先ずは専門的なことを勉強し、ステップアップする方が良くと考え、沖縄病院の大湾先生に相談し、半年間、獨協大学での研修に参加することが出来た。沖縄に子供を残し

たが、主人も、両親も、妹も巻き込みサポーターになって貰った。

- 獨協大学では、毎週、教授と研究課題についてのディスカッションがあり、実験や抄読会、気管支鏡、外来等、充実した半年間を過ごした。
- 帰沖後、病気を患い短時間勤務となったが、常勤スタッフの辞職を機に、フルタイムへ戻った。自ら外来を診た患者を、そのまま入院させられる楽さを感じた。現在では院外活動も充実し、日本呼吸器学会学術講演会でのポスター発表座長や第83回日本呼吸器学会・日本結核病学会日本サルコイドーシス/肉芽種性疾患学会九州支部秋季学術講演会イブニングセミナーにおいて「難治性喘息に対する抗体製剤の使い分けを考える～吸入支援 OkinaWa の活動報告を含めて～」を紹介した。
- 最後に、この先どうしようか、何かを変えたい、制限はあるがキャリアアップしたいなど悩みがあれば、是非近くにいる先輩に相談して欲しい。最大限にバックアップしてくれると思う。

### (4) 「介護：両親の看取り」

古波倉史子 浦添総合病院 外科医師は、両親を看取った経験について次のように述べた。

- 両親ともに、家族、周囲の手助け、職場の理解もあり、ほとんど苦勞せずに見送ることができた。この場を借りて改めて感謝したい。他に苦勞して介護している方がたくさんいらっしゃると思うが、少しでも参考になればと思う。
- 母親は胃癌で17年前に74歳で他界した。他界する2か月前、母の故郷・宮崎に点滴持参で父と三人で旅行をした。夜の母の体交、トイレの介助など、仕事をしながら、妹と交代で約1か月行った。他界する1週間前に、介護休暇をとった。他界前日に母の強い希望で、やんばるにドライブに出か

けた。自宅に辿り着いて、「行ってよかった。ありがとう！」が最後の言葉に。翌朝、自宅で息を引き取った。

- 父親は老衰で3年前に95歳で他界した。母の死後、14年間父親と二人暮らし。大動脈解離後、ADLが徐々に低下したが、95歳1か月まで内科医院を開業していた。ほぼ寝たきりになったのは他界する1～2週間前で、家族に見守られて安らかに息を引き取った。
- 父の年齢・病歴と、私の年齢・働き方の変化について、「90歳頃/トイレで転倒 ▶ 55歳/当直・オンコール免除、93歳/大動脈解離 (StanfordB) ▶ 59歳/朝夕の回診・カンファ免除/9時出勤～18時前に帰宅」「94歳/間質性肺炎 ▶ 60歳/ルーチンワークのない日は週休をとる」「95歳/軽い脳梗塞/介護保険、訪問診療、訪問看護 ▶ 61歳/週休、早退」「95歳/2016年7月30日他界 ▶ 2週間前から介護休暇」。
- 父への思いは、元気な間に少しでも多く父との時間を持ちたい。80代後半から、父の同窓会等の集まりに同伴。間質性肺炎後は、お風呂や散歩の付き添い、週末はドライブ、ランチ、広い公園などでウォーキング等を行った。那覇市内の妹、長くいる家政婦さんの力が大きかった。
- 介護とは、介護される人、介護する人にとって心残りが無いようにできる範囲で手助けをすること。相手を思いやる気持ちが大切だと思う。介護の対象、地理的な問題、仕事の内容などいろいろ問題がある。年休や介護休暇、介護休業などを有効利用する事、また職場の理解はとても大切である。

#### 意見交換

意見交換では「私の働き方～医師の働き方を考える～」をテーマに、4名のシンポジストとフロアを交えて次のような意見があった。

▼仕事量のバランス感覚は個々人で異なるため、その人のニーズに合った配分や采配が大

切。▼育児・家事同様、職場においても「主体性」を持つことが大事と感じた。▼管理職として必要なものは4ある仕事を3.5に減らす努力が必要で、皆で出来る仕事量をコントロールすることが大事。▼主治医制の撤廃は必須で、グループ制は皆にとって良い。▼組織全体が変わる切っ掛けとなった点は、労基署からの指導により残業時間の縮減を求められた。研修医を含めた医師の労働時間の見直し、当直明けは半日勤務の帰宅徹底、グループ制導入等、環境的には良くなった。▼当院でも昨年からは研修医は8時30分には帰宅するようルール化。ローテーション中の患者カルテ記載も免除している。▼当院の外科は3チームで編成され、半分主治医制のチーム医療を行っている。徐々にチーム医療の兆候が出ている。日曜日の回診もそれぞれが行うのではなく、当番制を敷き休める環境づくりに取り組んでいる。▼サポーターとの連携がとても大事と感じた。▼家庭の中でうまく折り合いをつける秘訣は、全てを分かってくれる、察してくれることを期待しないこと、口頭でしっかり気持ちを伝えることが大切。▼家事分担では、希望箇所をそれぞれが選ぶ。自然と穴があくため、あいた部分を議論しながら埋めていく。▼家族のコミュニケーションツールとしてカレンダーを活用し、予定管理の共有化を図っている。▼医学部6年生からの質問（現在専攻されている診療科は将来のライフイベント等を考慮して進んだ診療科なのか）に対しては、シンポジスト等から「希望する診療科であったから」「ライフイベントは考慮していない」「好きな道を選んだ方が長続きする」等の助言があった。

#### 総括

玉城研太郎 沖縄県医師会理事より次のとおりコメントがあった。

東北大学在籍時、外科不足の中、東北6県をカバーする使命があった。乳腺外科も半分以上がママさんドクターであった。限られた医療資源の中で如何に効率的に6県をカバーするか、

いろいろ取り組んで参った。一人ひとりがテーマを持ち、ワクワクするような仕事が出来たと思う。苦しい中でも皆が活気を持ち仕事することが重要だと思う。

それから介護については、働き方改革のピースで考えると非常に問題だと思う。社会全体の

仕組みを変えていかなければならない。女性医師部会、勤務医部会、産業保健分野、全て私が医師会の担当である。今日の話を含め対応していきたい。本日は有意義な会となり感謝申し上げます。

## 印象記



沖縄県医師会女性医師部会 副部長 知花 なおみ

去る9月19日木曜日に女性医師部会主催の「ドクターズフォーラム」が行われました。この会はこれまで「女性医師フォーラム」という名称で、平成19年より年に1度開催していましたが、女性医師のみならず男性医師も含めた支援の輪が広がり、女性医師の働きやすい職場は全ての医師が働きやすい環境であるという認識も生まれ、令和元年である今年から「ドクターズフォーラム」と名称を変更し開催されました。

4人の先生から、それぞれの年代のライフステージに直面した問題、その対処法、解決法が発表され、幅広い議論をすることができました。「主体性」「自分がしたいことを明確にする」「サポーターの確保と連携」「職場スタッフの協力と理解」「身近な先輩への相談」「家族の状態に応じた働き方の変遷」「様々な制度を有効活用すること」など、多くのエッセンスが盛り込まれた、とても素晴らしい発表でした。これまでのフォーラムでは、主に女性医師の出産や育児などのライフイベントとキャリアの作り方をテーマとして取りあげていましたが、今回はそこに病休や介護なども加わり、女性だけでなく、全ての医師に対してメッセージを送ることができたと思います。素晴らしい発表をしてくださった先生方に改めて感謝申し上げます。

その後の意見交換でも各病院の工夫が報告され、沖縄県内のそれぞれの病院での医師の働き方改革の広がりを実感することができました。

女性医師部会のこれまでの女性医師支援活動の中で、それぞれの年代、診療科、勤務形態、ニーズには多様性があり、その中でどのように対応していくかはそれぞれ異なり、様々なアプローチがあることを認識していましたが、今回その答えの選択肢がさらに広がった感じがします。

高齢者が増え、医療が複雑化する中、医師の働き方改革、新しい専門医制度の開始、医師や診療科の偏在の問題なども加わり、医師をとりまく環境は大きく変わってきています。個人の生活とキャリアの両立を支援する組織的な仕組み作りが今、求められています。若い世代のニーズに耳を傾けながら、その準備を進めることができる組織が生き残れる時代とも言えるでしょう。

女性医師部会では、これからもより良い医師の働き方を模索していくための取り組みを続けていく予定です。今回のドクターズフォーラムには女性のみでなく、多くの男性ならびに管理職の皆様のご参加をいただきました。このエールに背中を押してもらい、これからも活動してまいりたいと思いますので、引き続きご協力をよろしくお願い申し上げます。